

いつから尼崎に人が住み始めた？

「石を打ちくだいて作った打製（だせい）石器」を使って生活していた旧石器時代では、人々は、狩猟（しゅりょう＝かりをしてえもの捕えること）や食物採集で食料を得ていました。日本列島の旧石器時代は、人類が日本列島へ移住してきた時に始まり、終わりは1万6000年前（紀元前1万4000年）ぐらいと考えられています。日本列島に人類が住み始めたのは、今から20～30万年前だろうと推定されていますが、年代が確認できる出土品は約3万5千年前のものになります。したがって、日本における旧石器時代の始まりは、何年前からとはっきり言えないようです。

今から1万5000年前（紀元前1万3000年）ころから始まった縄文時代は何と約1万年以上続きました。氷河期が終わり地球の気候が温暖化すると、自然環境も変化しました。人々は「表面に縄（なわ）をころがしてつけた模様がある縄文（じょうもん）土器」や「みがきをかけて仕上げた磨製（ませい）石器」などを使い始めました。気候変動によって始まった縄文時代には、海面の上昇や自然環境の変化によって、漁労（ぎょろう＝魚や貝をとること）がさかんになり、食物も豊富になり、道具の進歩とともに以前よりも定住がすすんだと見られます。

尼崎市のある西摂〔せいせつ〕平野には、旧石器時代から少しずつ人が住み始めたようです。尼崎では、縄文時代後期の土器が猪名庄〔いなしょう〕遺跡の下層からわずかに見つかったものの、人々が定住していた証拠（しょうこ）となるような跡は見つかっていません。やがて中国大陸から水稻耕作、金属器、機織り（はたおり）などの新しい技術が伝わり、弥生文化という新しい文化の時代が始まりました。弥生時代には、それまでの狩猟・採集を中心とした社会と異なり、本格的な農業が始まりました。農業の開始にともない、人々は指導者（首長）を中心に集落をあげて自然環境に積極的にはたらきかけ、低湿地や河口部を苦勞しながら開拓していきました。より大きな開拓をすすめるために首長の権力は大きくなり、より広域の集落間の連携は、大規模集落を拠点とする政治勢力を各地に形成していきました。弥生前期の集落としては、猪名川下流域の田能〔たの〕遺跡・古宮（ふるみや）遺跡、武庫川下流域の上ノ島〔かみのしま〕遺跡・東武庫遺跡があげられます。いずれも近くに湿地をひかえ、米づくりに適していました。



田能遺跡 円形平地住居(復元したもの)

* 尼崎についての記述は、尼崎市立地域研究史料館「図説 尼崎の歴史 古代編」に基づきます。

* 写真は尼崎市立地域研究史料館アーカイブログより